

茨城大学学報

第323号

平成27年10月～平成27年11月



ホームカミングデー 全学的に初の本格開催

INDEX

- ◆ 茨城大学 平成27年関東・東北豪雨調査団
- ◆ 第11回茨城大学水交会を開催
- ◆ 岡田誠司在バンクーバー日本国総領事を招き特別講演
- ◆ 「水戸ホーリーホック」ホームゲームで三大学連携によるPRイベントを開催
- ◆ 地域データ分析システム活用 内閣官房担当者が出前講座
- ◆ 平成27年度 学長学術表彰 受賞記念講演会
- ◆ COC事業アクティブラーニング講習会およびFD・SDを開催
- ◆ 地方創生シンポジウムを開催 県内自治体関係者ら参加
- ◆ 気象台の予報官が特別警報の仕組みや活用を講義
- ◆ 茨城大学・茨城県・茨城産業会議の連携で気候変動と健康に関する講演会
- ◆ 農学部で留学生支援団体との懇談会・交流会
- ◆ 震災被災地で救出した文化財 修復終えて一挙展示
- ◆ 第66回茨苑祭を開催
- ◆ 平成27年度永年勤続者表彰式・懇談会を開催
- ◆ ホームカミングデー 初めての本格開催
- ◆ 土木と建築の融合によるまちづくり 建築家・團紀彦氏が講演
- ◆ 考古学研究ゼミ、栃木県壬生町から感謝状を授与
- ◆ 学生懇談会「学長Cafe」を開催

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 茨城大学 平成 27 年関東・東北豪雨調査団

茨城大学では、9 月 10 日に関東・東北地方で発生した豪雨による大規模な水害に対し、短期的・中長期的な視野で研究・支援を行うことを目的とした「茨城大学 平成 27 年関東・東北豪雨調査団」を結成しました。

水害の発生以降、同大でも多くの教職員、学生らが自主的に調査や支援を始動していましたが、それらの活動の情報を相互に共有し、協働による研究や支援を推進するため、各分野のグループをつなぐ形で調査団を発足することになりました。10 月 1 日現在、人文、教育、理、工、農の全学部から 32 名（うち 3 名は学外関係者）の研究者がメンバーになっています。

調査団は、土木の分野から現地での地質調査などを行う地圏環境グループ、被災地における農地の復旧方法は今後の栽培について検討する農業・生態系グループ、衛生リモートセンシングデータを活用した空間モニタリンググループ、UAV（ドローン）などを活用して避難行動等に役立つビッグデータの仕組み作りを目指す情報・避難行動グループ、文化財の救出を行う史料レスキューグループ、住宅被災世帯に対して大規模な調査を行う住宅被害グループ、心理面やコミュニティのサポートを行う住民ケア支援グループ、学生による現地での支援活動を促進する学生ボランティア・教育グループの 8 つのグループで活動します。

9 月 30 日（水）に行われた調査団の会議では、各グループの代表者が進捗状況や活動計画、現時点での課題などを報告し、情報交換を行いました。団長を務める伊藤哲司・地球変動適応科学研究機関長は、「東日本大震災の経験もあり、文系、理系の壁をこえた柔軟な連携が迅速にできた。地元大学だからこそできる調査・支援を進めたい」と話しています。



9 月 30 日に行われた調査団の会議の様子

◆ 第11回茨城大学水交会を開催

10月2日（金）、退職者と現職職員の親睦会である茨城大学水交会（すいこうかい）を水戸キャンパスで開催しました。

11回目の開催となる同会には、茨城大学の発展に尽力した職員OB・OG 25名が参集。三村信男学長、袖山禎之理事（事務局長）及び64名の現職職員が歓迎し、総会・学内見学・懇親会を行いました。

総会は都賀善信会長（元事務局長）による開会の辞に始まり、三村学長による歓迎の挨拶の後、袖山理事が同大学における近年の事業や改革の進捗状況、COGプラス採択等の近況を報告しました。質疑応答では参加者から多くの質問が寄せられると共に、現職職員に対して温かい激励が送られました。

一同は平成26年4月に改装された図書館本館を見学し、新しくなった設備や最近の取り組みについて担当者から説明を受けました。

見学後は恒例の懇親会が催され、出席者は酒肴を囲み旧交を温めました。若手職員はOB・OGのアドバイスや経験談に熱心に耳を傾け、懇親会は盛会のうちに終了しました。現職職員にとっては、退職者からの温かい支援を再認識するとともに、大学改革への良き励みとなる一日となりました。



開会の辞を述べる都賀善信会長（元事務局長）



懇親会の様子



昨年リニューアルした図書館を背景に

◆ 岡田誠司在バンクーバー日本国総領事を招き特別講演

10月5日（月）、在バンクーバー日本国総領事・岡田誠司氏による特別講演「外交実務の現場から国際情勢を見る～グローバルな視点を持つことの意味～」が開催されました。この講演は、本学の研究・教育の国際化の推進を目的に平成27年度に新設された国際戦略室が企画したものです。岡田氏が茨城県つくば市で育ったことなどから、茨城県の協力などにより実現しました。当日は、学生や教職員等、約100名が参加しました。

安全保障やエネルギー政策、食糧問題や難民問題など、様々な課題について現場での実体験を交えながら語った岡田氏。「日本人であるとともに国際人としての視点で物事をとらえ、課題や解決策を考えること」、「グローバル人材にとって言語力は不可欠。しかし言葉はツールに過ぎず、日本人として何を知っていて、何を語れるかの方が、国際社会においてはもっと重要である」との言葉に、参加者は真剣な面持ちで聞き入りました。



岡田誠司 在バンクーバー日本国総領事



メモをとりながら講演に聞き入る学生

◆ J2リーグ「水戸ホーリーホック」ホームゲームで 三大学連携による学園祭PRイベントを開催

株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホックの10月18日（日）開催のホームゲーム（会場：ケーズデンキスタジアム）において、同チームと連携協定を締結している茨城大学、常磐大学及び茨城キリスト教大学の有志学生が連携し、会場で応援イベントを開催しました。

本学からは茨苑祭実行委員会が参加し、他の2大学のイベントサークルと共同で、学園祭をPRするブースとステージを競技場入口近くに設置。試合の来場者に各大学それぞれが趣向を凝らしたパフォーマンスを披露し、キックオフ前の時間を盛り上げました。

試合は、2-0で水戸ホーリーホックが東京ベルディに勝利を収めた。



◆ 地域データ分析システム活用 内閣官房担当者が出前講座

10月14日（水）、28日（水）の2回にわたり、地域の経済・産業のビッグデータを参照できる地域経済分析システム「RESAS」（リーサス）の活用促進を目的とした内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局の担当者による特別講義を、人文学部の授業にて実施しました。

リーサスは、地域経済に関する産業、人口、観光、農業といった官民のさまざまなビッグデータをわかりやすく可視化し、地方自治体による様々な取り組みを情報面・データ面から支援することを目的に、政府が今年4月から提供しているシステムです。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局および内閣府地方創生推進室によると、同システムを学生にも積極的に活用してもらうことを目的に、操作方法の説明やワークショップで構成する出前講座を、全国各地で開催しているということです。茨城大学での出前講座は、全国の大学としては初めて行われました。

初日の講義では、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局の企画調査官らがリーサスの概要や活用例、具体的な使い方を説明した後、学生たちが小グループに分かれ、それぞれの関心やテーマに合わせてリーサスで情報を検索・分析し、地域課題について議論しました。その後、二日目の授業では、各グループが考案した地域活性化の施策案を発表しました。

授業を担当した内閣官房まち・ひと・しごと創生本部の担当者は、「学生のみなさんが、短期間でありながら、システムを使いこなし、関心のある地域課題に合わせて分析できていることがよく伝わった。興味深い発表がたくさんあったので、ぜひブラッシュアップさせて、政策コンテストに出品するなど実際に国や自治体へ提案してほしい」と話しました。



リーサスを使った授業の様子

◆ 平成 27 年度 学長学術表彰 受賞記念講演会

本学では、先進的、独創的な研究を実施している研究者の特筆すべき研究成果をたたえ、その研究成果と研究内容を学内外に広めるため、学長学術表彰を行っています。平成 27 年度は人文学部の谷口 基 教授と理学部の木村 眞 教授が優秀賞を、理学部の中村 麻子 准教授が奨励賞をそれぞれ受賞しました。

近代日本文学研究を専門とする人文学部の谷口 基 教授は、大正～昭和期の「変革探偵小説」の系譜を紹介した著書「変格探偵小説入門-奇想の遺産」で、第 67 回日本推理作家協会賞「評論その他の部門」を受賞しました。

理学部の木村 眞 教授は、約 40 年にわたる隕石研究の功績により、第 11 回日本鉱物科学会賞を受賞しました。

また、理学部の中村 麻子 准教授は、研究業績「高感度 DNA 損傷マーカーを用いた放射線生物影響に関する研究」で平成 26 年度日本放射線影響学会奨励賞を受賞しました。

10 月 28 日（水）には、3 名の受賞者による記念講演会が行われ、それぞれの研究成果の紹介に、学内から集まった多くの参加者たちが熱心に耳を傾けました。



優秀賞を受賞した人文学部・谷口基教授による講演の様子

◆ COC 事業アクティブラーニング講習会および FD・SD を開催

10月28日（水）、「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の一環として、アクティブラーニング講習会およびFD・SDを実施しました。

前半は、COC統括機構副機構長である内田聡教授の開会挨拶に続き、金沢大学人間科学系教授の佐川哲也氏による『金沢大学における「地域概論」の試行とアクティブラーニング』と題する基調講演が行なわれました。金沢大学は、本学よりも一年早い平成25年度に大学COC事業に採択されており、大学教育再生加速プログラムにおける優れたアクティブラーニング型授業を収録した授業カタログ作成の取組みや、今年度始まった全学必修の「地域概論」の概要等が紹介されました。

引き続き行われたFD・SDでは、内田教授から平成26年度の事業成果・外部評価結果及び平成27年度の取組みについて「教育」、「研究」、「社会貢献」などの面から解説が、周立波教授（COC地域研究委員会委員長）、渋谷敦司教授（COC地域共生委員会委員長）及び小松崎将一教授（COC地域貢献委員会委員長）から平成26年度及び平成27年度のプロジェクト概要について報告がありました。昨年度採択のプロジェクトの中には、今年度他省庁のプロジェクトに採択されるものがあることなどが紹介されました。続いて、社会連携センターの清水恵美子准教授から今年度より始動した地域志向教育プログラムの中核となる科目「茨城学」と、その課外活動にあたる「イバラキカク」の取組みについて説明があり、次に「茨城学」で授業を担当した農学部の福與徳文教授から「茨城学と地域計画学（地域志向科目）の事例」について報告が行われました。茨城学については、全15回の授業の各回の内容や、講義から「振り返り用紙」への学生の記述、学生同士の意見交換および学生と講師との意見交換というアクティブラーニングの具体的な進め方などが紹介されました。報告後、佐川教授より、今回のFD・SDの報告に対する講評があり、「教育」、「研究」、「社会貢献」が融合していくような展開が必要であることなどが述べられました。

当日は遠隔会議用システム（VCS）を活用し、水戸キャンパスの会場から日立・阿見両キャンパスにも講習会の模様が配信され、熱心な教職員の参加により、アクティブラーニング型授業の成績評価方法などについて活発な質疑応答が行われました。

茨城大学では今年度より全学でアクティブラーニング型授業が導入され、今回の講習会およびFD・SDは、PBL科目を含めた授業の深化・充実を狙いとしています。



開会の挨拶を述べる
内田 COC 統括機構副機構長



基調講演をおこなう
金沢大学佐川哲也教授



会場の様子

◆ 地方創生シンポジウムを開催 県内自治体関係者ら参加

11月3日（火・祝）、地域と大学が連携して進める地方創生の取り組みについて語るシンポジウム「まち・ひと・しごとと大学と！ いばらきの地方創生の今を語ろう」を水戸キャンパスで開催し、県内自治体の首長や職員など約200人が参加しました。

このシンポジウムは、内閣府の地方創生人材支援制度を通して今年4月に派遣された、常陸大宮市創生特別顧問で本学人文学部教授の西野 由希子 氏、総務省出身で高萩市地方創生政策担当部長を務めている米田 圭吾 氏、博報堂ブランドデザイン スマート×都市デザイン研究所長でもある桜川市参与の深谷 信介 氏の3氏と茨城大学が共同で企画し、実現しました。

シンポジウムでは、内閣府地方創生推進室の麦島 健志 次長が基調講演を行い、人口移動の推移や予測などのデータを示しながらまち・ひと・しごと創生総合戦略の概要を説明した上で、全国各地のユニークな取り組みを紹介しました。麦島氏は、「それぞれの地域のミクロなデータをきちんと見て問題提起をするとともに、自治体間の横のつながりを強化してほしい」と述べ、これからも活発に議論を行っていくことを参加者に呼びかけました。

後半のパネルディスカッションでは、西野氏、米田氏、深谷氏とともに、茨城県の理事兼政策審議監で同大OBでもある今瀬 肇 氏がパネラーを務め、それぞれの自治体の総合戦略や具体的な取り組みを紹介し、意見を交わしました。モデレーターを務めた佐川 泰弘 人文学部長は、「大学として、これまで地域に輩出してきたOB・OGとも手を組み、県内の自治体の情報を共有し、発信していくネットワークをつくっていきたい」とまとめました。

シンポジウム終了後にはキャンパス内で情報交換会が行われ、参加者間で親交を深めるとともに、今後も地方創生の情報発信の取り組みを大学として継続的に行っていくことが確認されました。



講演する内閣府地方創生推進室の麦島 次長



パネルディスカッションの様子

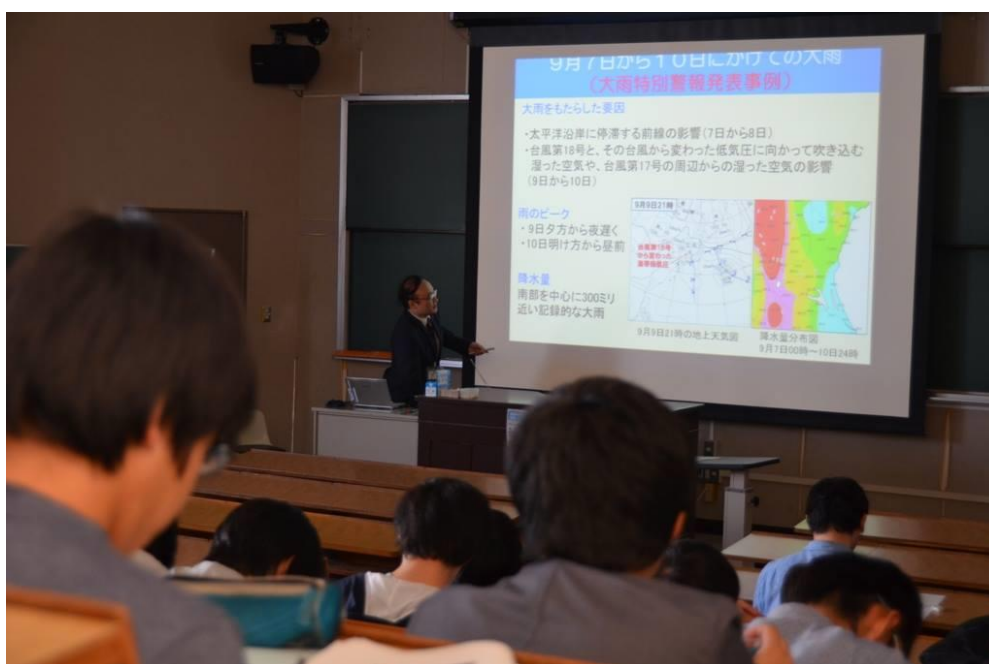
◆ 気象台の予報官が特別警報の仕組みや活用を講義

11月6日（金）、地域志向系の教養科目「自然災害と地域防災」の授業において、水戸地方気象台の予報官が講師を務める特別講義を行いました。

「自然災害と地域防災」は、学部1年生向けの教養科目で、地震や津波、水害、土砂災害などの過去の事例を通じて幅広く防災の知見を学び、今後の大学での研究や地域での生活、防災・減災の具体的な取り組みに活かせるようになることを目標とした授業。今年度初めて開講し、人文、教育、理、農、工の各学部から約70名の学生が履修しています。

特別講義では、「気象警報を学ぶ」と題し、水戸地方気象台予報官の森 美文氏が、今年9月に起きた関東・東北豪雨などの事例や、特別警報の仕組み、活用の仕方を説明しました。森氏は、「気象台が発表する情報は、使ってもらってこそ意味がある」とし、自治体などと連携しながら、住民に対して確実に情報を伝える仕組みを解説しました。また、「大雨のときなどは、特別警報が出るのを待つのではなく、警報が出た時点で適切な行動をとることが重要」と注意を呼びかけました。

今後は、地震津波防災官による、緊急地震速報についての特別講義も予定しています。水戸地方気象台から講師を招いた特別講義は本学において初めての試みで、同科目を担当する工学部の信岡 尚道 准教授は、「堤防などのハードウェアにせよ、情報伝達システムなどのソフトウェアにせよ、防災にとって完全なものない。専門家などに学び、それらの可能性と限界をきちんと知り、正しく活用しながら、地域や組織、家族の生命を守れるような人材に育ててほしい」と話しています。



特別講義を行う水戸地方気象台の森予報官

◆ 茨城大学・茨城県・茨城産業会議の連携で気候変動と健康に関する講演会

11月11日（水）、茨城県および茨城産業会議との連携による講演会「気候変動による健康への影響 猛暑への適応」を水戸京成ホテルにて開催し、行政関係者や企業、研究者、大学生や一般市民など148名が参加しました。

茨城大学、茨城県、茨城産業会議の3機関は、環境やエネルギーをテーマとしたイベントを毎年実施しており、本年で9回目の開催となります。今回は、夏に35度を超える猛暑日が何度も観測されていることや、昨年デング熱の国内感染が69年ぶりに確認されたことなどを受け、気候変動による健康への影響や感染症についての研究、適応策について紹介し、広く議論する場としました。講演には、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）でも活躍しているワシントン大学グローバルヘルス学部のクリスティ・イーバイ（Kristie Ebi）教授を招き、本イベントとして初めて同時通訳を導入して実施しました。

三村信男茨城大学長の挨拶のあと基調講演を行ったイーバイ氏は、気候変動の歴史的推移や予測等のデータを示した上で、実際に世界各地で表れている健康への影響や感染の広がり、それに対して必要な緩和策、適応策の考え方や具体的な事例を紹介しました。続いて、筑波大学体育系教授の本田 靖 氏が、熱ストレスによる身体への影響に関する最新の知見を解説。さらに、国立感染症研究所昆虫医科学部主任研究官の小林 睦生 氏が、デング熱の感染を媒介するシマ蚊などの国内外での分布状況を説明しました。

その後、各登壇者によって繰り広げられた総合討論では、茨城大学地球変動適応科学研究機関の田村 誠 准教授の進行のもと、来場者から挙げられた「地域企業がコミットできる適応策にはどんなものが考えられるか」「異常気象に対するアラートシステムをどう構築していくべきか」といった質問を柱に、活発な議論が交わされました。



クリスティ・イーバイ氏による基調講演



総合討論の様子

◆ 農学部で留学生支援団体との懇談会・交流会

11月11日（水）、阿見キャンパス（阿見町）において、外国人留学生と阿見町国際交流協会との懇談会および交流会を実施しました。

本会は、留学生が日頃抱えている生活上の諸問題や支援の現状および課題等について、留学生本人と支援団体が情報共有することにより、留学生活の質の向上や地域との交流促進を図ったものです。本学からは、留学生センター長、農学部長、評議員等教職員13名のほか、農学部在籍する留学生5名及び日本人チューター1名が参加し、阿見町国際交流協会会長を務める天田 富司男 阿見町長をはじめとする国際交流協会会員7名と意見交換しました。

前半の懇談会では、阿見町国際交流協会より相互ホームステイ等の交流事業の実績報告があり、「日本でのホームステイを希望する外国人がいても、宗教に配慮した食事など、受け入れ側の知識や体制が不十分なため実現を断念するケースがある」等の課題が示され、異文化教育の重要性が確認されました。天田町長が「在日外国人は社会の大切な構成員であるが、日本における生活支援や異文化理解はとても十分とは言えない。留学生の視点から国際交流協会や阿見町に対する要望や意見を聞かせてほしい」と述べると、留学生からは「町役場などの生活上必要な施設には、日本語の不自由な外国人も利用できるよう英語表記を導入してほしい」「大学だけでなく、地域の小中学生との交流もあると良い。町の広報誌等で広く周知してほしい」等の要望が出されました。また、多数の外国人学生を抱える教員からは、「災害発生時などは外国人が社会的に孤立する場面がある。手厚いサポートはありがたいが、外国人が自力で日常生活を送れるよう、自立を促す支援も必要」との意見が出されました。

農学部「こぶし会館」において開催された交流会では、阿見町国際交流協会の亀村達男事務局長による乾杯の挨拶の後、参加した留学生を含む約30名が軽食を囲んで歓談した。留学生と国際交流協会会員は、留学生向けのイベントについて意見交換を行ったほか、外国人が参加できるテニスサークルの結成を相談するなど、盛んな交流が行われました。



懇談会で要望を述べる留学生



交流会の様子（天田会長と留学生等）

◆ 震災被災地で救出した文化財 修復終えて一挙展示

茨城大学図書館では、東日本大震災の地震や津波で損傷を受けるなどし、学生や市民らのボランティアが救出、修復を施した文化遺産を公開する企画展「東日本大震災と文化遺産―学生と市民が守ったふるさとの記憶―」を11月14日(土)から12月6日(日)まで開催しました。期間中、ギャラリートークや関連のシンポジウムも実施されます。

未曾有の災害となった2011年3月の東日本大震災では、地震による家屋の倒壊や津波で、貴重な歴史史料や文化財にも被害が及びました。一般家庭の倉庫などに保管されていたものは、郷土史を伝える貴重な史料でありながら、所蔵者自身も存在や内容を正確に把握しておらず、生活復旧の過程で廃棄されてしまう可能性も考えられました。

震災発生後、茨城大学人文学部の教員や学生らの呼びかけで発足した「茨城史料ネット」(代表：茨城大学人文学部 高橋 修 教授)は、他の史料保護団体の専門家やボランティアとも協力し、茨城県内や東北地方の各地の一般家庭などで、史料の調査・救出を行ってきました。ひたちなか市内で発見された「伊達政宗起請文」など一部の史料は既に公開されていましたが、多くの文化財は、学生や市民のボランティアが4年以上の歳月をかけて整理や修復の作業を行ってきました。今回の企画展は、修復を終えたそれらの文化財20件を初めて一挙に公開したものです。

企画展では、「伊達政宗起請文」や室町期の「両頭愛染明王像」といった指定文化財級の貴重な文化財に加え、県内各地の歴史を伝える絵画や写真、さらには宮城県女川町で津波に流されながらも奇跡的に救出され、「漂流茶箱」として話題となった茶箱と中に保管されていた史料など、東北各地で活動する史料レスキューが保護した史料も展示されました。展覧会の様子は、テレビや新聞などの報道機関でも取り上げられ、連日多くの来場者で賑わいました。



絵画や古文書などが並ぶ会場の様子



伊達政宗直筆の起請文

◆ 第 66 回茨苑祭を開催

11月14日（土）、15日（日）の2日間、第66回茨苑祭が開催されました。天気はあいにくの雨でしたが、会場には多くの来場者が集まり、今年も賑わいました。フィナーレには大きな花火が夜空に上げられました。



◆ ホームカミングデー 初めての本格開催

11月15日(日)、水戸キャンパスにおいて「茨城大学ホームカミングデー2015」を開催しました。本学では、昨年プレ企画としてホームカミングデーを試行しましたが、全学としての本格的な開催は今年が初めてです。県内外から約150名の卒業生が参加し、同日に茨苑祭が開催されていたこともあり、会場は大いに賑わいました。

図書館のラーニングコモンズで行われた立食形式のランチパーティーでは、各世代、各学部の卒業生や留学生のOB・OGが集まり、現役の学生たちとともに食事を楽しみました。本学教育学部の出身で、現在茨城県の副知事を務めている山口やちゑ氏は、「茨苑祭に来たのは卒業以来。大きな銀杏の木だけは当時から変わらない。母校である茨城大学が発展していくのは嬉しい。県庁では約1000人も茨城大学卒業生が働いているので、今後も協力しながら大学に寄与していきたい」と挨拶し、集まった参加者たちから大きな拍手が贈られました。

パーティー終了後、図書館のライブラリーホールに会場を移して行われたメインイベントは、学生の管弦楽団によるオープニングアクトで幕を開けました。同窓会連合会の福地 省行 会長の挨拶に続いて、三村学長が登壇し、大学改革の状況などを説明しました。その上で三村学長は、「学長になり、いろんな場に顔を出すようになったが、どこへ行っても同窓会の方々が大学の一番のサポーターだと感じる。創立70周年に向けて、さまざまな基金も立ち上げていきたい」と述べました。その後は、今年9月の関東・東北豪雨の被災地でボランティアを行った学生ボランティアサークルなどの地域参画プロジェクトの報告、合唱団によるパフォーマンス、さらに高橋 修 図書館長による歴史講演など、充実したプログラムが次々と展開され、最後は来場者全員で校歌斉唱と記念撮影を行い、盛況のうちに閉会しました。



ランチパーティーの様子



挨拶を述べる山口副知事



参加者全員で記念撮影

◆ 平成 27 年度永年勤続者表彰式・懇談会を開催

11 月 19 日（木）、永年勤続者表彰式が行われ、役員出席のもと、三村学長から表彰者一人ひとりに表彰状が手渡され、あわせて記念品が贈られました。

永年勤続者表彰は、永年（勤続 20 年）にわたり勤務し、職務に精励した教職員を表彰する制度で、27 年度は 8 名が対象となりました。



謝辞を述べる四倉教諭

表彰式では、三村学長から永年の労へのねぎらいと今後の活躍への期待が述べられ、これに対し、表彰者を代表して教育学部附属特別支援学校の四倉教諭が謝辞を述べました。

表彰式後は昼食会を兼ねた懇談会が開かれ、各理事から表彰者への祝辞と激励の言葉が送られたほか、各表彰者がこれまでの勤務経験や今後の抱負を述べるなど、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。



被表彰者（50 音順、敬称略）

木村 亨（工学部技術部〔職員〕）、黒田彰男（工学部技術部〔職員〕）、
武田由美子（学務部留学交流課〔職員〕）、中山香理（附属小学校〔附属学校教員〕）、
新妻広章（附属小学校〔附属学校教員〕）、村上明弘（学務部学務課〔職員〕）、
横堀冴子（附属小学校〔附属学校教員〕）、四倉直美（附属特別支援学校〔附属学校教員〕） 計 8 名

◆ 土木と建築の融合によるまちづくり 建築家・團紀彦氏が講演

11月20日（金）、大学COC事業地域志向教育支援プロジェクトの取り組みとして、公開シンポジウム『土木と建築の融合によるまちづくり』を、水戸キャンパス図書館3階ライブラリーホールで開催しました。

茨城大学大学院理工学研究科都市システム工学専攻では、『景観まちづくり学特論』という授業において、茨城県日立市における近代化産業遺産を活用したまちづくりを提案する演習課題を実施してきました。過去から現在に至る施設の活用状況の変化、交通システムと施設立地の関係、観光と日常生活の相互作用など、単体の施設計画を行うだけでは解決できない複雑な問題が見出され、その結果、土木と建築を一体的に考えたまちづくりの重要性が導かれました。

今回の公開シンポジウムでは、三村 信男 学長による挨拶と、馬場 充 工学部長による工学部・理工学部研究科の改革についての説明のあと、『土木と建築の融合』を提言している建築家・團紀彦氏による基調講演が行われました。團氏は、自らが手がけたプロジェクトを事例として紹介しながら、「建築＝遊びと捉えられ、土木と建築の関係は、『人の命か遊び心か』という不毛な天秤にかけられることも多い。土地を平場に造成した上で建築家に発注する、ということが、日本をダメにしてきたところがあると思う。土木と環境の間の壁は組織的なものであって、融合された姿こそが自然。土木と建築との間の新たな対話の場を作っていくことが、1+1から3を生んでいくことになる」と語りました。

参加者からの活発な質疑応答のあと、閉会の挨拶をした工学部都市システム工学部門長の呉 智深 教授は、「本学としても、分離しがちだった土木と建築の融合を積極的に進め、学生たちとともに1+1から3を生んでいきたい」と、決意を述べました。



建築家・團紀彦氏による講演

◆ 考古学研究ゼミ、栃木県壬生町から感謝状を授与

人文学部の考古学研究ゼミ（担当：田中 裕 人文学部教授）の学生たちで組織され、栃木県壬生町の古墳群の発掘調査に取り組んでいる「みぶ車塚古墳発掘調査団」が、このほど壬生町長より感謝状を授与されました。これは、壬生古墳群での学術調査活動とともに、今年9月の関東・東北豪雨における避難者対応の功績を称えたものです。

「みぶ車塚古墳発掘調査団」では、考古学を専門に学ぶ15名の学生たちが中心となり、昨年（平成26年）度より発掘調査に取り組んでいます。大学の夏休み期間中であつた今年の8月20日～9月13日にも現地にて東京学芸大学との合同合宿を実施。9月10日に発生した関東・東北豪雨に際しては、調査団の合宿先が避難所となり、学生たちは自分たちの食料を供出して炊き出しをするなど、被災された方々の支援を行いました。

感謝状は、11月21日（土）に行われた「壬生町合併60周年記念シンポジウム」の席上で、小菅一弥町長から学生に手渡されました。感謝状は、「貴調査団は昨年度から壬生古墳群の学術調査に参加され多くの成果をあげてこられました」と調査について称えるとともに、「この度の関東・東北豪雨時には合宿所において避難者への対応に努めその温かく心のこもった行動は災害時の模範となるものでした」として、労いの言葉がしたためられています。

調査団の学生代表である大学院人文科学研究科2年の栗原さんは、「発掘調査だけでなく、豪雨災害の際の避難所運営など、自分たちの取り組みによって壬生町に貢献することができ、嬉しく思います」と話しています。



発掘作業の様子



調査現場の水をくみ出す作業



調査団のメンバー

◆ 学生懇談会「学長 Cafe」を開催

11月25日（水）、学長と学生との懇談会「学長 Cafe」が大学教育センターの主催で開催されました。学長と学生がコーヒーを飲みながら、和やかな雰囲気のもと、学内でも取り組みを進めている「国際化と英語教育」をテーマに、学長を含む教員4名と留学生を含む学生16名が意見を交わしました。

懇談会は「グローバルに活躍するために必要な語学力」と「留学の意義」を主題に、留学支援や英語教育を担当する教員2名が茨城大学の国際化に向けた取り組み事例を説明したあと、学長と学生が自由に意見交換を行いました。学生からは積極的に発言や質問がなされ、授業内容に関する具体的な提案や、留学生と交流する機会の拡充、留学生の派遣・受入の双方に対する支援の強化といった要望が出されました。三村学長は「学生の意見を参考にしながら改革を進めたい」と話し、さらに、自身の海外経験も交えながら、「世界には多様な価値観がある中で、ぜひ自分なりのものの考え方や行動指針を持ってほしい」とのメッセージを学生に送りました。学生からは、「茨城大学を変えたいという大学の姿勢が感じられた」「自分の意見を大学に伝えることができてよかった」などの感想が寄せられました。



開催の挨拶をする三村学長



学生懇談会の様子



意見を述べる学生